

医史学と私

古川 明

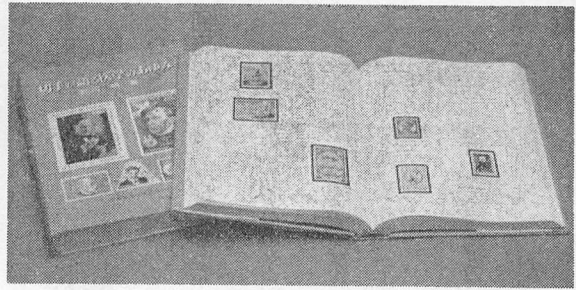
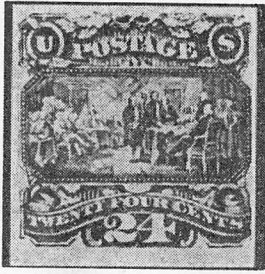
今から約三十年前、私は大島蘭三郎先生の紹介で日本医史学会に入会した。当時私は医学切手の解説記事を『治療薬報』（三共株式会社）に掲載していたので、医史学の基礎知識が必要だったためである。その理由で、私の医史学は切手を主な資料としているため、日本の医学史よりも世界各国の医学史のほうが対象となっている。

昭和六十一年四月に、著書『切手が語る医学のあゆみ』を医歯薬出版から発行することができた。それには医学切手に関心を持った緒方富雄、今田見信、長門谷洋治、本間邦則の諸先生をはじめ、日本医史学会や医学切手友の会の諸先輩、同僚の御指導、御援助の力が大きく、感謝の気持ちでいっぱいである。

著書『切手が語る医学のあゆみ』

この本には、医学関係の切手一、三五八枚と補充図版八三枚を使用し、原始医学から現代医学に至るまでの世界の医学史を、主として人物切手を中心に、系統的に記載した。その結果、B五判で、本文五八四ページ、カラーページ四となった（図一）。

本書が完成して残念に思ったのは、フランスが医学関係の人物切手を一〇〇枚近くも発行しているのに、日本の医学切手は極めて少なく、シールや写真を代用せざるを得なかったことである。イギリスの切手の人物は国王や女王を原則としているから別として、ヨーロッパ、アメリカなどのほか中南米の国々にも、かなりたくさん医学切手を発行している。



右より 図1 古川明著：切手が語る医学のあゆみ

図2 医学切手第1号：独立宣言の署名人たち（アメリカ1876年発行）

イギリスの医学者肖像切手はリスターだけで、ペニシリン切手にも、フレミングの肖像がない。しかしフレミングをはじめハーヴェイやジェンナーら有名な医学者切手は、ほかの国から発行されているからまだよいが、国外発行の日本の医学者切手はエクアドルの野口英世だけという淋しさである。

メデイカル・フィラテリー

医学切手収集とその研究を「メデイカル・フィラテリー Medical philately」と命名したのはアメリカの医史学者ギャリソン Fielding H. Garrison（一八七〇～一九三五）である。彼は一九二九年に書いた論文のなかで、

「貨幣は古代から使われていたので、歴史の研究資料としてしばしば利用されていたのに対し、切手が医史学の研究に利用されることはやっと今始まったばかりだが、将来は有望なものになるだろう」

と述べ、メデイカル・フィラテリーが貨幣学 Numismatics とともに、医史学研究の手段となることを予言した。当時医学切手は十種にも達していなかったが、彼が亡くなった一九三五年ごろからは、続々と医学切手が発行され、今日では数えることができなほと多くなった。私が一応切手による医史学の著書を出版したことは、ギャリソンのこの予言を証明できたと言っても過言ではないだろう。

メデイカル・フィラテリーでは、「アメリカ合衆国独立宣言百年記念切手」を医学切手第一号としている（図2）。五四名の独立宣言署名人のなかに、ベンジャミ

ン・ラッシュ Benjamin Rush (一七四五—一八一三)をはじめ五名の医師がいるからである。切手は一八七六年のフィラデルフィアの万国博覧会記念として発行され、図案は歴史画家トランブル John Trumbull 作の「独立宣言の署名人たち」が選ばれた。

第七七回日本医史学会総会(昭和五十年、金沢)で、私は、「アメリカ合衆国の独立二百年と医師ベンジャミン・ラッシュ」の報告をした(『日医史誌』二二巻、一三二—一三三、昭和五十一)。ラッシュは、ヨーロッパ医学から自国の医学を独立させたことで医史上重要な医学者で、日本の杉田玄白とほぼ同時代の人である。昭和五十一年十月、日本医史学会、蘭学資料研究会合同例会で、カリフォルニア大学医史学教授ウェニス女史 Ilza Veith の講演 “American medicine two hundred years ago” (二百年前のアメリカ医学)があった(『日医史誌』二二巻、八一—九二、緒方富雄訳一八一—一九四、昭和五十一)。演者はフランクリンとラッシュを当時の医学界の重要人物として紹介した。

メディカル・フィラテリーはアメリカがもつとも盛んである。Medical Subjects Unit of American Topical Association (アメリカ・トピカル協会の医学部会)では、一九五五年から “Scalpel & Tongue” (メスとピンセット) 一名 Journal of American Medical Philately) という雑誌を発行している。日本にも一九七二年に「医学切手友の会」が生まれ、現在約八〇名の会員がいる。

医学の紋章(シンボル)「アスクレピオスの杖」

医史学での私の主テーマは「医学の紋章(シンボル)アスクレピオスの杖」である。日本ではこれを研究する人はまれだが、欧米では関心を持っている人が少なくない。オランダ人スハウテン J. Schouten の著書 “The rod and serpent of Asklepios, 1967” やスイス人デオナ W. Deonna の報告 “Emblèmes médicaux, du bâton serpenitaire d'Asklépios, Revue Internationale de la Croix-Rouge, 1933” などはその代表的な例である。

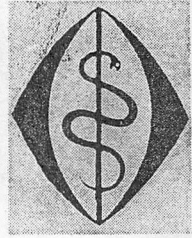
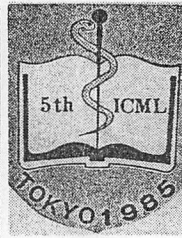
第一一回日本医史学会総会（日本歯科医史学会、日本薬史学会と合同、昭和五十五年、東京）に、私は特別講演「医学、歯学、薬学のシンボル・マーク」を担当した（『日医史誌』二六卷、二五七～二五九、昭和五十五年）。その講演要旨は『歯界展望』（五八卷、九七七～九八六、昭和五十六）に発表してある。その後の追加研究は第八四回日本医史学会総会（昭和五十八年、横浜）で、「医学のシンボル、蛇杖の歴史」として報告した（『日医史誌』二九卷、一〇五～一〇七、昭和五十八）。

『医科学大事典』全五〇卷（講談社）は昭和五十八年に完成した立派な医学事典だが、その表紙の飾図の中央に紋章「アスクレピオスの杖」がある（図3）。世界的にも一流の図案家の作品であるが、この試作品には、「ヘルメスの杖」が描かれていた。「ヘルメスの杖」には「アスクレピオスの杖」とちがって、二匹の蛇がからまり、杖の頭に翼のついていることが多い。ヘルメスは商業、通信、交通などの神で、その杖は幸福、平和などを象徴し、医学のシンボルとは言い難い。

この医科学大事典の執筆者として、私は「アスクレピオス」の記載を担当した（同事典第一卷、一〇九～一一〇ページ）。幸運なことに、筆者の原稿を編集者が読んで、表紙の紋章の試作品が「ヘルメスの杖」であることに気付き、私に意見を求めにきた。そこで私は試作品が適当でないことを指摘したので、「アスクレピオスの杖」に描き直し、正しい図案が実現したという裏話がある。

また第五回国際医学図書館会議（一九八四年、東京）の紋章となった「アスクレピオスの杖」も、試作品は「ヘルメスの杖」だったが依頼を受けた私の進言で訂正された（『医学のあゆみ』一二九卷八五五～八五六、昭和五十九）（図4）。

昭和六十一年年末に、私は大瀧紀雄先生の紹介で、横浜市立大学医学部から、学術講演の講師に贈呈する記念牌作製の協力を依頼された。記念牌の図案として、同大学の土屋弘吉名誉教授が「アスクレピオスの肖像」を選んだためだった。私の切手が記念牌の肖像のモデルとして使われたので、「デザイン担当者」の名目で、私は昭和六十二年二月二十四日に、



- 右より 図3 医科学大事典(講談社)の表紙飾絵(紋章)「アスクレピオスの杖」
図4 第5回国際医学図書館会議の紋章
図5 アスクレピオス(ギリシヤ1959年発行の切手)
図6 アスクレピオス(キプロス1968年発行の切手)

西丸興一会長から感謝状を頂いた。ここにモデルになったギリシヤ(一九五九年発行)とキプロス(一九六八年発行)の「アスクレピオス」の切手を掲載した(図5・6)。

「アスクレピオスの杖」がいつごろ日本に紹介されたかを記録したものはない。私は昭和四十九年(一九七四)東京日本橋の三越本店で開催された「洋学二百年記念展」の解説書に、ハイステル著『外科学』の蘭訳本の扉絵があり、そのなかの「アスクレピオスの杖」に深い印象を受けた。その後この書物の扉絵にはオランダ語で詩文形式の解説があり、それを日本語訳した人がいままで一人もいないことを知った。

昭和五十一年から数年間私は日蘭学会でオランダ語の講習を受けたので、この解説の翻訳を試みたところ、中央の「アスクレピオスの杖」は医神アスクレピオス自身を表現し、彼の像はどこにも描かれていない。杖を彼の父、医神アポロンに持たせ、アスクレピオス自身を描かなかつたこの絵の作者は、この杖が医学のシンボルであることを読者に理解させたかたのではないだろうか。ギリシヤ神話がまだ普及していなかった江戸時代に、この扉絵の解説が困難だったことは、本書を『瘍医新書』として翻訳した杉田玄白、大槻玄沢がそのなかで扉絵に触れていないことでもわかる。大鳥蘭三郎先生はこの蘭訳書の解説を『医学選粹』に掲載したが(同誌第一〇号、昭和五十二、日本医学文化保存会)、扉

絵は供覧だけで解説はない。私は、この扉絵の「アスクレピオスの杖」がわが国にはじめて紹介されたものと推察し、昭和六十一年十二月、日本医史学会と蘭学資料研究会の合同例会で報告した（『日医史誌』三三卷、二四二～二四四、昭和六十二）。その後これを『医学のあゆみ』にも掲載した（同誌一四三卷、七〇七～七〇八、昭和六十二）。

日本人が「アスクレピオスの杖」を正しく理解できたのは明治の末期であろう。当時の医史学雑誌『刀圭新報』の表紙に、アスクレピオスとその杖が描かれている。私の調査では、『刀圭新報』の表紙の絵は、スイスの医史学者ルクレルク Daniel Le Clerc（一六五二～一七二八）著「Histoire de la médecine, Genève 1696」（医史学）の扉絵をそのまま転写したものである。この絵を『刀圭新報』に借用した人は医史学の先達富士川游氏である公算が大きい。

以上の通り、医学の紋章（シンボル）としての「アスクレピオスの杖」は江戸時代に日本に紹介されたが、それを理解できたのは明治の末期であろう。しかしその受容の状況は現在でも、まだ完全とは言えない。

切手に描かれた外科医学者

私の臨床の専門は外科なので、外科医の切手にはとくに興味を持っている。ここにはそのなから、前に報告したビルロートとテリヨンの切手を選んだ。第八二回日本医史学会総会（昭和五十六年、札幌）で、私は「ビルロートの胃切除成功百年」の報告をした（『日医史誌』二七卷、二八〇～二八二、昭和五十六）。ビルロート Theodor Billroth（一八二九～一八九四）が世界ではじめて胃切除術に成功したのは一八八一年で、昭和五十六年はそれから百年にあたる記念すべき年だった。ビルロートの温顔は一九三七年オーストリア発行の切手に描かれた（図7）。彼の生誕百年の一九二九年には、記念コインも発行された（図8）。

外科無菌法の開拓者であるフランスのテリヨン Octave Terrillon（一八四四～一八九五）はあまりひろく知られていない。第七一回日本医史学会総会（昭和四十五年、千葉）で、私は「外科無菌法の開拓者テリヨン」の報告をした（『日医



右より 図7 ビルロート

(オーストリア1937年発行の切手)

図8 ビルロート (オーストリア1929年発行のコイン)

図9 テリヨン (フランス1957年発行の切手)

図10 ファイルズ画：ザ・ドクター (アメリカ1947年発行の切手)



史誌』一六卷、五八〇五九、昭和四十五)。外科無菌法 Aseptic

はパストゥールの着想(一八七八)により、一八八三年ごろからテリヨンによって実施された。テリヨンについて、ドイツのベルグマン von Bergmann が実施し急速に世界中にひろまった。ベルグマンの無菌法は一八九一年に助手のシンメルブッシュ Schimmelbusch によって、テリヨンの発表より早く公表されたので、外科無菌法発見の優先者となり、テリヨンの名はあまり知られていない。フランスは一九五七年に「無菌法の開拓者」として、テリヨンの切手を発行した(図9)。彼の肖像

に滅菌器、顕微鏡、外科器械が添えてある。私はテリヨンの功績をできるだけ多くの人に知ってもらいたいと思って、昭和五十二年日仏医学会総会でも、「外科手術無菌法の開拓者テリヨン」の講演をした。

医史学の立場から見た絵画

昭和二十五年私はアメリカ医師会創立一〇〇年記念切手(一九四七年発行)を入手したが、その図案はイギリスの名画「The doctor」(ザ・ドクター)だった(図10)。なぜアメリカが外国の絵を切手に選んだのが私の疑問となり、それが動機で各方面から調査を続け、いろいろな事実がわかった。そのときから私は医学の絵画に興味を持ち、次に記すように世界の国々への絵画について、

医史学の立場から觀賞するようになった。

(一) ファイルズ作「ザ・ドクター」

ファイルズ *Sir Luke Fildes* (一八八四～一九二七) の「ザ・ドクター」について、私は前に記載したことがある(『けんさ』第九卷四号、一〇一〇、昭和五十五)。この絵はフィラデルフィアのワイズ研究所 *Weyeth Laboratory* でコピーが作られ、一九三三年シカゴの万国博覧会に出品されたので、多くのアメリカ人に觀賞され、とくに医師に親しまれた。絵のなかの医師クラーク *Sir James Clark* (一七八八～一八七〇) の重症患児に対する熱心な診療振りが画面に漲っているので、観る人に強い印象を与えたためである。

私は三つの「ザ・ドクター」があることを知ったが、ファイルズが最初に描いた原画は競売され、現在アメリカのペンシルベニア州のセアー町 *Sayer* のガスリー・クリニック *Guthrie Clinic* に所蔵されている。第二のロンドンのテート美術館の「ザ・ドクター」はこの美術館開設(一八九七)にあたり、開設者テート *Sir Henry Tate* の要請によって描かれたもので、大きさは一六六×二四二センチメートルである。第三の「ザ・ドクター」は前述のアメリカのコピーで、現在ニューヨークのローゼンワルト美術館に所蔵されている。テート美術館の絵は患児の重病なことと両親の不安、悲痛を強調するため暗い雰囲気絵だが、アメリカのコピーでは細部を立体的にわかりやすく描いてある。この絵がアメリカの切手の原画となった。人命の貴さ、医師、患者、家族の相互信頼感を巧に表現した名画である。

(二) レンブラント作「トゥルプの解剖学講義」

さきに私は、「レンブラントの名画トゥルプとデーマンの解剖学講義」を原著として報告した(『日医史誌』二〇卷、二八九～三一二、昭和四十九)。トゥルプの解剖学講義はオランダのハーグの王立美術館マウリツハイスに、デーマンの解



- 右より 図 11 レンブラント画：トゥルプの解剖学講義（黒田清輝1886年のスケッチ）
 図 12 レンブラント画：トゥルプの解剖学講義（トーゴ共和国1968年発行の切手）
 図 13 リベラ画：心臓病学の歴史の部分（メキシコ1972年発行の切手）



剖学講義は阿姆斯特ルダムの国立美術館に所蔵されている。前者は一六三二年レンブラント Rembrandt Har-
 menszoon van Rijn（一六〇六—一六六九）が二十六歳
 のときの作品である。トゥルプがこの八名の集団肖像画
 をこの方面の第一人者の代りに、若い未経験のレンブラ
 ントに注文したことは、当時の阿姆斯特ルダムとしては
 大きな驚きだった。トゥルプは阿姆斯特ルダム外科医組合の建物内
 に飾られていた前任教授たちの絵に負けないような、自分中心の集
 団肖像画を後世に残したい気持から、思い切って新進画家レンブラ
 ントを選んだのだが、これが図にあたり、好評を博して、レンブラ
 ントの出世作ともなった。

レンブラントのこの名画をはじめて日本に紹介した人は黒田清輝
 である。彼がヨーロッパに留学したとき、明治十九年（一八八六）
 九月十三日付のハーグから母貞子宛の手紙にこの絵を見たことを記
 載し、絵の模写素描が添えてあった（図11）。「トゥルプの解剖学講
 義は数カ国の切手に描かれたが、オランダからは発行されていない。
 い。ここに一九六八年発行のトーゴ共和国の切手を掲載する（図
 12）。なお、トゥルプの医学業績について、私は第七六回日本医史
 学会総会（昭和五十年、大阪）で発表し（『日医史誌』第二一卷、

一三六～一三七、昭和五十)、原著としても報告した(『日医史誌』二四卷、二二四～二三五、三三七～三四六、昭和五十三)。

(三) リベラ作壁画「心臓病学の歴史」

メキシコの壁画画家ディエゴ・リベラ Diego Rivera (一八八六～一九五七)の医学関係の作品として、「心臓病学の歴史」(一九四四)が現在メキシコ国立心臓病学研究所の大講堂のロビーを飾っている。二面から成り、第一面に一八名、第二面に二九名、計四七名の心臓病関係の学者が描かれている。この二面の壁画の下には小さな壁画「世界の古代医学」として、中国、ギリシャ、アフリカ、メキシコの古代医学の絵が二面ずつ添えてある。壁画全体の高さは五メートルに及ぶ大きなものである。昭和五十一年十月の日本医史学会例会に、私はこの壁画について報告し(『日医史誌』二二卷、七二～七三、昭和五十一、『びざん通信』に原著として掲載した(四一号、六五三～六五九、四二号、六八三～六八六、昭和五十一))。

この壁画の一部が一九七二年のWHO世界保健デー(心臓月間)の記念切手として発行された(図13)。図案は「心電図検査中のアイントホーフエンとウィルソン」である。

リベラが一九四四年メキシコ国立心臓病学研究所の開所に間に合わせて制作したこの壁画は、一九七六年研究所の移転のため、新設研究所に転送された。旧研究所はメキシコ市の中心部に近く、現在小児病院となったが、新研究所はメキシコ市の最南部にある。私は一九七八年夏メキシコ市で、移転のことを知らなかったため、新研究所を探すのに苦労し、時刻時間外にとくに許可を得て、この見事な壁画を観賞することができた。

ま と め

医学切手を正しく理解するためには医史学の知識が必要なことを痛感して、私が日本医史学会に入会してから約三十年経過した。昭和六十一年（一九八六）四月に、私は著書『切手が語る医学のあゆみ』を出版し、これによってアメリカの医史学者ギャリソンの新造語「メディカル・フィラテリー」（一九二九年）の概念を表現できたと信じている。一般に医学切手第一号には、歴史画家トランプル作「アメリカ合衆国独立宣言の署名人たち」の切手（一八七六年発行）が挙げられる。医史学における私の主テーマは「医学の紋章（シンボル）アスタレピオスの杖」である。この文には、私の専門が外科なので、外科医の切手のなかからビルロートとテリヨンを選んで記載した。なお私は医学の絵画切手にも興味を持っているので、ザ・ドクター（ファイルズ）、解剖学講義（レンブラント）、心臓病学の歴史（リベラ）について解説した。

（東京都杉並区）